

CONTENTS

- 2 あなたの心を守りなさい イ・ヨンファン牧師牧師
- 3 写真のある『窓』 キム・ジュソク牧師
 - ・わたしが喜びをもって走って行く理由
- 4 今日のマナ チョー・ヨンギ牧師
 - ・神の御心と時
- 6 メッセージ 志垣重政牧師
 - ・あなたがたがわたしに繋がっており
- 9 ひまわりとアサガオ イ・チャンシク牧師
- 10 神の国 アシエル・イントレーター牧師
 - ・伝道者の書（コヘレトの言葉）の概要
- 16 霊的リーダーシップ イ・ヨンファン牧師
 - ・絶対肯定リーダーシップ
- 20 心理が答えである ハン・ギチェ牧師牧師
 - ・自殺を薦める社会
- 25 野原にて—— イ・ジェジン宣教師
 - ・幕屋の祈り——第二回目
- 29 **特集** | 復活の主を受け入れよう
 - ・復活がなければ、キリスト教は存在しない——キム・ソンロ牧師
 - ・イエスの復活と喜び——イ・チョンシク牧師
- 41 **企画** | 新型コロナウイルスを通して見た シン・ソンジョン牧師
 - ・伝染病の恐怖、徹底的に目覚めていなければならない

この「しなげ」は、おもに韓国版信仰界 2020 年 4 月号より抜粋して、翻訳し再構成したものです。ちなみに、聖書の御言葉は「口語訳」を引用しています。

あなたの心を守りなさい

イ・ヨンファン牧師

昨年 12 月、中国の武漢において初めて発生した新型コロナウイルス感染症が全世界に拡散されたことで、わが国にも膨大な影響をもたらしました。多数の人が COVID-19 に感染され、マスクや生活必需品の品薄状態が起き、すべての学校の始業が延期されました。

また微熱やせきなど、ちょっとでも体に異常があれば、もしかしたらコロナウイルスに感染したのではと不安を訴える人が増え、「コロナ恐怖症」という新造語が生まれるほどです。ソウル市で COVID-19 の心理的な支援団長を務めているキム・ヒョンス教授（ミョンジ大学医学部メンタルヘルス科）は、私たちの社会で広がりつつあるコロナ恐怖症について懸念し、次のように述べました。

「感染症は、恐怖とともに怒りを起こさせ、心を辛くさせる。私たちに感染するウイルスは、時には命を奪うほど症状を悪化させることもあるが、心にも深い傷を負わせ社会的分裂や混乱を招いたりする。私たちは身体生命を守り、心理をも守る免疫性を養う必要がある。」

キム・ヒョンス教授は、このようなコロナ恐怖症に打ち勝つために、「激励ワクチン」「希望ワクチン」など、肯定的な心のワクチンを持つことを勧めています。

このようなワクチンに加えて、私たちは『御言葉ワクチン』『祈りワクチン』『信仰ワクチン』をもって、心の内のすべての恐怖を追い出さなければなりません。さらに、いまだに恐怖のゆえに震える社会に暖かい慰労と激励を伝え、イエス様がくださる真の平安を分かち合えることを希望します。

「油断することなく、あなたの心を守れ、命の泉は、これから流れ出るからである。」（箴言 4：23）†

写真のある『窓』

キム・ジュソク 牧師 写真作家

わたしが喜びをもって走って行く理由



薄目を開けても
世の中はみな見えます。

信仰の目を少し開ければ
栄光に輝く天国が見えるのです。

だから、わたしは毎週喜びをもって
教会に走って行くのです。

＊今日のマナ



神の御心と時



趙 鏞基

ヨイド純福音教会元老牧師

人生で、骨折って労苦しても得るものがなければ、すべての努力は水の泡となります。農夫が春という時を良くとらえ畑を耕して種を蒔くならば、秋に豊かな収穫を収めることができます。

しかし、大地がカチカチに凍り付いた冬に苦労して畑を耕して種を蒔いても、彼の労苦は無駄になるだけです。私たちが日々実を結ぶためには、時に従うことです。時を得なければ、浮き草のようにさまよう人生になってしまいます。

それでは、神の時を知るためには、私たちはどうすればよいのでしょうか？

まず、神の御旨を知らなければなりません。創世記からヨハネの黙示録に至るまでの聖書の御言葉に、神の御旨が記録されています。聖書を読めば、神の御旨を知ることができます。主日礼拝、水曜礼拝、そして区域礼拝にも休まず参加し、御言葉を取り次ぐメッセージを聞くことで、神の御心をさらに知るこ

とができます。

次に、神の定められた時を知るためには、切に祈り求めなければなりません。

「神様、救いの時に私を従わせてください。」

「神様、病が癒される時を与えてください。」

「神様、祝福の時を与えてください。」と。

このように神様の時を待ち望みながら、祈り求めなければなりません。時間を決めて祈っても、聖霊の感動があれば徹夜や断食をしながら祈っても良いでしょう。すると、神の時が近寄ってきます。

神の時がくると、私たちにできるところから行動を開始します。明確な目標を設定し、計画を立て、実行に移します。そうすると、私たちの生活が日々新しく豊かになるでしょう。†



あなたがたが わたしに繋がっており

—— ヨハネによる福音書 15 章 1 ～ 7 節 ——

「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしにつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていないならば、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていないならば、実を結ぶことができない。一中略一人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」

イエス様は自然の比喻を通して、多くのことを教えてくださいました。「私は葡萄の木、あなた方はその枝である。もし人が私に繋がっており、また私がその人と繋がっておれば、その人は実

を豊かに結ぶ様になる。私から離れては、あなた方は何一つできないからである」(ヨハネ 15:5)。つまり、イエス様と一心同体でなければ、神の国の実を結ぶことはできないと教えてくださったのです。

アダムは何ら罪のないかたちで創られましたが、罪を犯し、神から分離してしまいました。霊が死んだのです。残念ながら、人類は自らの力で霊を生き返らせることはできません。どんなに倫理道徳的に生きたとしても、霊は生き返らないのです。何故、子孫まで原罪を負わなければならないのでしょうか。それは、麦を蒔けば麦ができるように、自然の法則どおり、アダムを蒔けばアダムが生まれてしまうからです。人類は、子々孫々、同じことを繰り返してきたのです。「見よ、私は不義の中に生れました。私の母は罪の内に私を身籠りました」(詩篇 51:5)。貧しいから、教育が不足しているから罪を犯すのだと主張する人がいます。だとしたら、歴史上最高の文化水準にある今は、罪が殆どなくなっているはずですが、実際はそうではありません。倫理道徳を強化しても、霊は生き返らないのです。だからこそ、救い主が必要でした。救い主とは私たちの霊を生き返らせることのできる存在です。救い主は、神であるのと同時に、人でなければなりません。イエス様は人となって来られ、私たちと一心同体になってくださいました。罪のアダムの連鎖を断ち切り、最後のアダムとして十字架に架かり、霊をよみがえらせる生贄となられたのです。

私たちが進んでイエス様と一心同体にならなければなりません。「あなたがたが私に繋がっており、私の言葉があなた方に留まっているならば、何でも望むものを求めるがよい。そうすれば

ば、与えられるであろう」(ヨハネ 15:7)。信仰によって、イエス様と一心同体になったことを受け入れるのです。イエス様の死は私たちの死、イエス様の復活は私たちの復活です。十字架の贖いにより罪を清算されたイエス様と一つになれば、罪赦された者となります。別の助け主聖霊様は、まさしくイエス様ですから、一心同体であれば、聖霊充滿になれる。イエス様が鞭打たれたことにより病を清算されましたから、共にいる私たちは癒され、健康になります。聖書に『木に架けられる者は呪われる』とありますが、呪いを清算されたイエス様と一心同体であれば、呪いからの解放とアブラハムの祝福を得ることができます。何よりも、復活のイエス様と一緒にあれば、私たちは間違いなく天国の住民なのです。もはや、私たちはアダムの子孫ではなく、イエス様の子孫になり、神の国の相続人になったのです。一心同体であることを高らかに宣言しなければなりません。唇の告白を通して、イエス様と一心同体であることを体感しましょう。

それでは、イエス様と一心同体になることによりどんな実を結ぶことができるのでしょうか。まずは、感謝と賛美の実を結びます。献身の実、栄光に満ちた暮らしの実、信仰の実、希望の実、そして愛の実を結ぶことができます。御霊の九つの実を結ぶことができます。更には、伝道の実を結ぶことができます。キリスト教は学問でも修養でもありません。実を結ぶためにあるのです。イエス様と一心同体であることを忘れないください。一心同体とは、イエス様と同じ考え、言葉、行動を持つことです。皆さんは、イエス様と一心同体になった新しい人です。皆さんの人生が変わりますように主の御名によってお祈り致します。†



ひまわりとアサガオ

人通りの多い道端に小さなお花畑がありました。人々は花畑にあるベンチで休息を取ったり、綺麗な花を見ては心と体が癒されたりしました。

花の中で、バラとユリは特に人気がありました。今年もそれぞれ美しい花を咲かせるために、すくすく成長していました。しかし新しく植えたアサガオは、なかなか成長しませんでした。なぜなら、アサガオはだれかの助けがなければ、上に伸びて行けないからです。

アサガオは他の花に、「体を貸してくれないか」と頼みました。バラは体に棘があるから助けられないと、ユリは茎が弱いから助けられないと言いました。他の花もそれぞれの理由で助けられないと言ったのです。アサガオは上に伸びることができず、他の花々の間に隠れ弱ってしまいました。

その時、ひまわりがアサガオに言いました。

「わたしはきれいな花を咲かすために頑張ったけど、丈が大きすぎて風に勝てず、いつも折れてしまいます。だから、一度も丈夫で綺麗な花を咲かすことができません。アサガオ、わたしの体に絡まって上に伸びてみませんか？」アサガオはとてもありがたいと思いました。そしてひまわりの体を支えとして、細くて弱々しい茎を上へ伸ばし始めました。そしてもう少し経つと、野原にはあらゆる花木が綺麗な花を咲かせるはずでした。

ところがある日、突然空が真っ暗になり、風とともに雨が降りはじめました。花畑の花々は、毎年経験することなので心配していませんでしたが、ひまわりは、今年も美しい花を咲かすのは無理かもしれないと悲しんでいました。

風雨がますます強くなり、今まで経験したことのない大雨と、非常に強い風でした。バラもユリも他の花も、今度の雨風に耐え切れず、倒れてしまいました。しかし、不思議なことが起きました。丈が大きくて、ちょっと強い風が吹くと倒れてしまうひまわりですが、あんなに強い風にも屈せず、しっかりと立っていました。実は、弱々しくみえたアサガオの茎が、倒れそうになったひまわりをしっかりと支えていたからです。

様々な花が咲きましたが、倒れて傷ついたバラやユリや他の花は、今年は以前のような美しい花を咲かすことができませんでした。ひまわりは大きくて美しい、丸い花を咲かしていました。アサガオも赤、黄色、紫の花を咲かせ、背の高いひまわりの体全体を飾りました。道端の小さな花畑は、ひまわりとアサガオの明るい笑みでいっぱいになりました。†

伝道者の書 (コヘレトの言葉) の概要



伝道者の書（コヘレトの言葉）は奥深い書簡で、それを調べるだけでも哲学書一冊が必要なほどです。「コヘレト」という単語は集会の指導者、この場合は著者であるソロモン王を指します。

「伝道者は言う、空の空、空の空、いっさいは空である。」（伝道者の書 1:2）

虚（むな）しさを指すヘブル語の単語はヘヴェル、「息、一息」という意味です。最も小さな物質や、意味を持つ何かに対する小さな隠喩です。アダムとエバの最初の子アベルの名前、ヘヴェ

アシェル・イントレーター 牧師・リバイブ・イスラエル 代表



リバイブ・イスラエル（www.reviveisrael.org）創立者であり、国際ティクン代表である。ラビ家庭のユダヤ人であり、アメリカのハーバード大学を首席で卒業した後、イエス様に奇跡的に出会った。1991年イスラエルに移住、正統派ラビたちと共に長年の間聖書研究を続けながら教会とイスラエルの関係、ユダヤ人と異邦人の間で和解とイスラエル回復のためのビジョンを持って働いておられる。

ルと同一語です。ソロモンは世を見て、すべてが「むなしい」、「無意味」だと言いました。まるで兄カインによって殺害されたアベルの生涯が、無に帰したかのようになったことと同じです。

文字どおりにみれば、この箇所は「すべてが単なる一息にすぎない」という意味です。すべての人は死ぬため、一回の息よりも儚（はかな）いものだと言っているのです。

すべてを手にした者

ソロモンは、イスラエル王国が神の栄光と力に満ちた最盛期の時の王でした。彼はこの世の誰よりも多くの祝福と富、子孫、快樂、知恵、女性と政治的権力を持っていました。彼は、望むものは何でも手にすることができました。すべてにおいて祝福されたソロモンは、この書簡を書き記せる独特な位置にいました。この書の主題は、彼がこの世で体験したこととは非常に対照的です。すべてのものを手にした人が、「いっさいは空である」と言うのです。すべてを手にした人なので、彼だけが完全たる確信をもって、「すべては無意味だ」と言っているのです。

ソロモンが伝道者の書を記したのは、人間の生き方と生涯の在

りかたを説明するためでした。彼は、誰もが理解しやすくするために、普遍的かつ哲学的な観点からこの書を書きました。この書全体に『主』という言葉は出てきません。反対に、神のより一般的な御名エロヒムを使っています。こういうかたちで、ユダヤ人、キリスト者、ムスリム、人本主義者、不可知論者や無神論者、すべての人がこの書に記された論理に共感できるようにしたのです。

哲学的ジレンマ

この書の最初の3章をみれば、ソロモンは人間が体験できるありとあらゆることをしてきましたが、すべてにおいて永久的意味が抜けていると描写しています。なぜなら、人生の終わりは善であれ悪であれ、すべての人は死ぬと言うのです。有限な人間の存在は、すべての無限な意味がなくなりそうです。ですからソロモンは、超越的な霊的意味に対する自分の探求に向き合うジレンマを広げています。

「神のなされることは皆その時にかなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない。」（伝道者の書3:11）

ここでソロモンは、二種類の重大な観察結果を提示します。外側を見ながら、彼は物質世界のすべてのものに美しさと秩序があることに注目します。これは、知恵と知識を持つ、全能なる創造者が存在しなければならないことを示唆します。しかし、内側を見て彼は、人間に永遠なるもの、この世を越えることに対する渴望が存在することに注目します。

この二極の観察結果は、この世（現世）に何かがより加わるべきだという結論に至らせます。人生の真の意味は、永遠および神

と関連があるということです。ソロモンは自身の人間的経験のスペクトルを越える、霊的真理を探求しつつあったのです。

不公平の問題

次に彼が発見したのは、何かが誤っているというこの世の実です。単純に意味が不在なだけでなく、道徳的問題があるということです。この世には悪と不公正があります。

「わたしはまた、日の下を見たが、さばきを行う所にも不正があり、公義を行う所にも不正がある。」（伝道者の書3:16）

この地での人生が有限かつ制限的であるだけでなく、世間には社会的な不公正があります。霊的な意味としてもそれをキチンと位置付けることが必要になります。人間の行動から、過ちを正す必要があるのです。

ソロモンは自然を見て、すべてのものが美しいと悟ります。心を見たとき、彼は永遠への渴望を悟ります。人間社会を見て、彼は邪悪さを悟ります。どうしてこういう矛盾があり得るのでしょうか？ これは哲学的問題ではなく、道徳的な問題だと、彼は言っています。法廷や議会や警察で、私たちが義を追求しようとしても見出すことはできません。不公正が蔓延しているからです。

上か下か？

私は、ハーバードで哲学を勉強しながら、虚無のジレンマに陥り、「実存的虚無主義者」になりました。存在は、ただ存在すること以外に何の意味がない、という哲学的結論に至ったのです。ある日、私はエレベーターの床に座り込んでしまいました。エレベーターに同乗していた人が、「何階ですか」と訊きました。私はこのように答えました。「それに何の意味があるのですか？」と。私は、私たちの存在の虚しさというジレンマを悟りましたが、そ

の時まで、まだ解決方法を見出せませんでした。

「だれが知るか、人の子らの霊は上にのぼり、獣の霊は地にくだるかを。」（伝道者の書 3:21）

ソロモンは、死が終わりではないことを悟ります。人間の霊は、死ねば肉体から離れることを悟ります。彼は、霊は上にのぼるか下にくだっていかであるかと悟ります。上にのぼるのは善良で、下にくだるのは悪しきだということを知っています。しかし、永遠の結果において、その差を決める方法を知りません。ここには顕著な危険があります。彼は哲学的パニックに陥るが、この時点でいかなる解決策も見出せませんでした。

ソロモンは自身の霊が上にのぼれば正しい人で、それが一種の霊的な義や善に結びついていることを悟ります。しかし、それは問題を悪化させるだけです。

「善を行い、罪を犯さない正しい人は世にいない。」（伝道者の書 7:20）

ソロモンは、すべての人が罪を犯すことを理解していました。最も善良な人でも、正しい人にはなれません。神は人の心をご存知です。ソロモンは、自分も神の目からみて正しい人でないことを理解しています。私たちの道徳的状態は正しくありません。そのために、私たちは下って行く道にいることは明らかです。

「ちりは、もとのように土に帰り、霊はこれを授けた神に帰る。」（伝道者の書 12:7）

ですから、歴史上最も明哲な人も神のもとに帰り、その方の審判を受けるのです。この世は有限です。それゆえ意味がありません。この世には悪があります。ゆえに正義に対する要求があります。この世の終わりに、私たちは神の御前で審判を受けなければならない、それに基づいて善であれ悪であれ、残りの『永遠』に向き合わなければならないのです。

答は何か？

このような展望は、そのものだけ見れば、恐れが生じて怖くなります。

「事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである。」（伝道者の書 12:13～14）

「事の帰する所」の結論はこうです。神は、私たちに自由意志と良心を与えてくださいました。私たちには善いことや悪いことを見極めて選択する能力があります。したがって、私たちは自らの選択に対する道徳的責任があります。行為に対する責任を負わなければならないのです。死ぬ時、私たちの霊は肉体を離れて神に帰り、私たちの行ないに基づいて審判を受けます。私たちの行ないのすべてが見えるようになり、隠されたこともすべて露わになるでしょう。

これが律法と預言書の道徳的結論です。歴史上最も賢かった人の霊的結論です。これは私たちにジレンマと赦し、道徳的変革、そして永遠の命の必要を抱かせます。

このジレンマのゆえに、新約の福音書が回答として与えられたのです。ソロモンは、人生の意味という哲学的疑問を提示します。しかし、ソロモンの子孫であり、より偉大なイエス様が解決方法を示してくださったのです。†



絶対肯定の リーダーシップ



人間のDANは徹底して否定的です。しかし、神は人間を神のかたちに創造しただけではなく、万物の霊長としました。人間を生育し、繁栄し、地に満ちて、すべての生物を治める（創世記1:27～28）特権を与えてくださったのです。

狡猾なへびはエバにこのように質問しました。

「へびは女に言った、『園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか』（創世記3:1）

へびはエバに徹底的に否定的な質問を投げかけました。「園にあるどの木からも取って食べるなど、ほんとうに神が言われたのですか？」と。神は「園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない」とされ、「それを取って食べると、きっと死ぬであろう」（創世記2:16-17）と言われた。しかし、へびは絶対否定の質問をエバに投げかけ、彼女を陥れることに成功しました。エバはこの否定的質問に「死んではいけないから」（創世記3:3）と答えることでへびの罠にかかり、結局善悪を知る実を取って食べ、エデンの園から追い出されました。

罪は結局、神の御言葉に対する否定から来ます。人類歴史において代々に根を下ろしてきたこの否定思考は、人類を破滅へと導きます。悪魔は、「盗んだり、殺したり、滅ぼしたりする」（ヨハネ10:10）悪魔の計画を、人間の否定思考を通して思うままに振る舞ってきました。このような悪魔の歴史は、イエス様が十字架で「すべては終わった」（ヨハネ19:30）と仰せられた時、ようやくその勢力が完全に一掃されました。

肯定と否定の間

モーセがエジプトで奴隷生活をしていたイスラエルの民を解放し、カナンのに辿り着くまで40年間戦ったのは、イスラエル民の不平不満やつぶやき、否定的な思考でした。彼らは40年間、一日も欠かさず恨みつぶやき、不平不満を言い、否定的な言葉を続けていました。

その結果、出エジプトした20歳以上の大人のなかで、カナン

の祝福を享受した者は、絶対肯定の信仰を持つヨシュアとカレブだけでした。40 日間カナンを偵察して戻った各部族代表 12 人の斥候中、10 人はイスラエルの民の前で徹底的に否定的な報告をしました。

「そして彼らはその探った地のことを、イスラエルの人々に悪く言いふらして言った、『わたしたちが行き巡って探った地は、そこに住む者を滅ぼす地です。またその所でわたしたちが見た民はみな背の高い人々です。わたしたちはまたそこで、ネピリムから出たアナクの子孫ネピリムを見ました。わたしたちには自分が、いなごのように思われ、また彼らにも、そう見えたとはいえません。』」（民数記 13:32 ～ 33）

しかし、ヨシュアとカレブは 10 人の報告と正反対の絶対肯定の報告をしました。

「イスラエルの人々の全会衆に言った、『わたしたちが行き巡って探った地は非常に良い地です。もし、主が良しとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわたしたちにくださるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。ただ、主にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼らはわたしたちの食べ物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません。』」（民数記 14:7 ～ 9）

しかしイスラエルの民は、ヨシュアとカレブの肯定的報告に耳を傾けませんでした。既に 10 人の斥候から否定的な報告を受けており、絶対的否定の思考に捕らわれていたからです。

「そこで、会衆はみな声をあげて叫び、民はその夜、泣き明かした。またイスラエルの人々はみなモーセとアロンにむかってつぶやき、全会衆は彼らに言った、『ああ、わたしたちはエジプト

の国で死んでいたらよかったのに。この荒野で死んでいたらよかったのに。なにゆえ、主はわたしたちをこの地に連れてきて、つるぎに倒れさせ、またわたしたちの妻子をえじきとされるのであろうか。エジプトに帰る方が、むしろ良いではないか。』」（民数記 14:1 ～ 3）

もし、イスラエルの民が絶対肯定のリーダーシップを持つヨシュアとカレブの報告を受け入れていたならば、あれほど彼らが願っていたカナンを踏めたはずでしょう。しかし彼らは、肯定の報告を拒み否定の報告を選ぶことで、自ら破滅の道へと行ったのです。

私たちは聖書が与える教訓に耳を傾けなければなりません。12 人中 10 人が否定的な思考のままに、考え、そして話したように、ほとんどの人が否定的な思考の奴隷になっていることを知らなければいけません。

指導者は徹底的な肯定信仰で武装しなければなりません。

ミヨンジ大学医学部メンタルヘルス科キム・ヒョンス教授は、新型コロナウイルスを克服したいと思うなら、心に肯定的思考のワクチンを打たなければならないと述べています。肯定的思考は、すべての絶望を打ち負かすことができます。疾病をも打ち負かし、否定的な現実を克服し変化させるのです。すべての人が否定的に言い、否定的に考えながら生きていく今日、絶対肯定の信仰を持つ指導者が絶対に必要です。絶対肯定の無限なる資源は、神の御言葉の中にあります。†

自殺を薦める社会



韓国警察庁統計によると、2017年に自殺した人は12,463人。2018年には13,670人に増加しました。韓国では、一日平均37.5人が自殺し、10万人に対する自殺率は26.6人とOECD加盟36か国の中で一位です。これは、韓国の社会的生命力が弱体化しつつあることの反証です。

デュルケンは、「自殺は、犠牲者が自身の積極的、ないしは消極的な行為により、直接・間接にもたらされる死の結果を予め予見する行動である」と定義しました。そして、彼は社会学的に自殺を利己的な(egoistic)自殺、利他的な(altruistic)自殺、道徳

的無秩序(anomic)の自殺、この三つの類型に分けて説明しました。

利己的な自殺は、個人が社会によく馴染めないことによって起こります。個人的行動の目的と社会の構造的機会との間の不一致です。ここでは個人の努力が無効となり、生存の意味もないと感じたとき、己を殺めるのです。これは、個人的自我が過度に主張されている状態で、極端な利己主義的な形態として現われる個人主義的な自殺です。利他的な自殺は、個人が宗教的理由であったり、政治的な信念信条のゆえに選ぶ死です。社会集団の中で、ある義務のゆえに選ぶ自殺とも言えます。道徳的無秩序の自殺は、個人の欲や満足度が社会規範や公共概念に反したり逆らうときに起こります。個人の幸福追求の欲求や、それを満足させる社会的手段がバランスを失ったときに発生します。

この三つの類型の自殺は、混合した形で現われることが多いです。利己的な自殺と道徳的無秩序の自殺は、自己本位的なものであり、利他的な自殺は集団的自殺であるという、相違点があります。前近代社会においては集団的自殺が多かったのですが、今日では産業化・都市化とともに個人の権益が伸長したので自己本位的な自殺が増加しています。

自殺は社会環境や個人心理とが複合的に絡み合っているために、社会だけのせいにすることはできません。しかし、今や韓国社会は、多くの善良な人を死に追いやっているような印象をぬぐえません。過度に競走を煽る韓国社会は、競走から脱落した人に失敗者の烙印を押し淘汰(とうた)させています。「生存競争で生き残れる者だけが生きるようにせよ」という新自由主義市場の論理とスローガンは、社会を弱肉強食の戦場に転落させています。1997年以来、韓国社会にIMFプログラムが導入され、「リストラ」だ「構造調整」だといって大量の失業者が避けられなくなり、皆が生き残るためには一部の犠牲者の存在も仕方がないかの

社会環境が、多くの人を自殺という「弱者の脱落」に追い込んでいくかです。

また、不条理な社会構造のもとでは、自身の潔白を立証し正義に訴えるよりは、自決で締めくくることがになります。無慈悲な社会は、犠牲になった人に同情するより非難することで、自身を責めるようにします。典型的な「犠牲者非難」(blaming the victim)です。このように死の文化である競走主義、物質主義、快楽主義が人々を自殺に追い込んでいるのです。

経済的豊かさは、「生活の聖さ」よりも「生活の質」(quality of life)により関心を寄せるようにさせ、「生きる価値のない人生」も存在するということを密かに注入し、『こんな人生なら……』という極端な行動を助長、ないしは幫助(ほうじょ)しています。このように人権に対する歪曲された理解は、自殺を「死ぬ権利」という、一種の権利行使に美化してしまいます。これは、安楽死問題においても同じです。『生きる権利』はあっても、『死ぬ権利』や『人を殺める権利』はありません。生命は神から授けられた贈り物であり、私たちは生命の「主人」ではなく、生命の「管理者」なのです。

「主こそ神であることを知れ。われらを造られたものは主であって、われらは主のものである」(詩篇 100:3)。

「あなたがたは知らないのか。自分のからだは、神から受けて自分の内に宿っている聖霊の宮であって、あなたがたは、もはや自分自身のものではないのである」(I コリント 6:19)。

自殺は権利ではなく、生命に対する神の主権を蹂躪する悪しき行為です。そして、人間の生命の尊厳性は、私たちの教育水準や業績の賜物でもあります。が、外部的な何らかの条件によって獲得できるのではなく、天におられる父なる神がすべての人に同一に付与されるものです。ですから、「神の摂理」という観点から、「生

きる価値のない生命」はこの世に存在はしません。このような正しい「生命の神学」だけが、この死の暗闇の翳(かげ)を追い出すことができるのです。

自殺の予防策

自殺を予防する方法は何でしょうか？ まず、牧会的観点から、自殺する人の立場を考えてみる必要があります。家庭が壊れ、未来に対する不安や経済的な圧迫から、人々は自殺を試みることを一種の意思疎通の「最終手段」として選択します。自殺は、助けと関心を求める叫びであり、彼らが一連の事態を「どう感じるか」を訴える切実なあがきであると見なすべきです。極端な方法を選ぶ前に、彼らの声を真面目に聞いてあげる社会機関や隣人がいれば、自殺を未然に防げるはずです。

今日の問題は、社会のどの機関も彼らに関心を傾けることができず、牧会者や家族にさえも虚心坦懐(きょしんたんかい)自由に意思疎通ができないということにあります。教会や牧会者は、落ちこぼれ疎外された人たちを尋ね求め、彼らを包容できなければなりません。イエス様のように、「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい。あなたがたを休ませてあげよう」(マタイ 11:28)と、招き入れなければならないのです。

そして、親が子どもを教育する際に、苦痛も辛さも人生における一部分であるという事実を、前もって教えなければなりません。苦痛を上手く乗り越えれば、さらにより豊かになり、美しい人生になれるということを教えなければなりません。子どもをあまり弱々しく育ててはいけません。

また、成功第一主義の歪んだ価値観をもって子どもを追い込んではいけません。親は生命の重要性の価値観を再整備し、いつでも、いかなる姿であっても受け入れる準備ができていると子ども

たちに示すことです。それが、子どもたちの自殺を事前に防ぐことができるのです。

さらに自殺予防のために、「共同体意識の回復」も急がれます。今や韓国社会に蔓延しており、毎年増加している自殺は、韓国社会が共同体的連帯の強い絆を失いつつあるという証拠です。韓国社会のアイデンティティの危機 (identity crisis) を雄弁に物語っています。韓国社会は、構成員たちに未来に対する確固たるヴィジョンを与えることもできず、互いに関心を示さない冷淡な社会的雰囲気を作りながらも、共同体の結束が破壊される様子をただ見ているだけです。職場では、同僚との間に愛が消え去り成果をめぐる競走意識だけが高まり、チームワークよりは生き残りのためのジャングルの法則が大勢です。社会の指導層から率先して自分を捨て、皆で共生する道を見出し、共同体の結束を築かなければなりません。

心理学的に、あるいは神学的に自殺を防ぐためには、「人生の意味を見出すこと」が並行してされなければなりません。心理療法の一つである意味中心治療、つまりロゴセラピー (logotherapy) の父であるヴィクトール・フランクルは、『死の収容所から』という著書で、人間はどんな状況にあっても「意味」を見出そうとする意志があり、いったん意味さえ見出せば、どんな苦難も耐え抜き打ち勝つことができる、という事実を体験をもって証明しました。人生の意味を失うならば、自己アイデンティティの危機に陥り、直ちに生存の意味を失うため、自殺を選ぶようになります。外的な「苦難」が問題ではなく、意味を見出せない「苦痛」がより大きな問題なのです。

神の愛と神の創造、被造物の尊さを強調するキリスト教こそが、彷徨 (さまよ) い絶望しながら死の淵に立っている人に、真の人生の意味を与えられる生命 (いのち) の宗教です。†



幕屋の祈り ― 第二回目



「また、彼らにわたしのために聖所を造らせなさい。わたしが彼らのうちに住むためである。すべてあなたに示す幕屋の型および、そのもろもろの器の型に従って、これを造らなければならない。」(出エジプト 25:8～9)

神は、モーセとイスラエルの民に「シナイ契約」と「トーラ (モーセ 5 書)」を授けられた後、イスラエルの民と一緒に住む聖

所、幕屋を建てるよう命じられました。また主は、預言者エレミヤを通して、シナイ契約は結婚の契約であったと言われました。

「この契約はわたしが彼らの先祖をその手をとってエジプトの地から導き出した日に立てたようなものではない。わたしは彼らの夫であったのだが、彼らはそのわたしの契約を破ったと主は言われる。」(エレミヤ 31:32)

新婚の時のような愛

結婚した夫婦は一つの家に住みます。神はすべての民族の中で、イスラエルの民を特別な宝(出エジプト 19:5)として、祭司の国と聖なる民(出エジプト 19:6)にしたいと願われました。花婿が花嫁を愛するように、神はイスラエルの民を愛しておられたので、彼らと一緒に住む家を建てるように命じられたのです。

幕屋を完成した後、40年間の荒野生活を通して、イスラエルの民は主なる神を知り、愛し、恐れ、従順する主の宝としての民になっていきました。神はこの荒野を新婚の時の愛に思われました。

まさに新婚旅行の期間だと思われたのです。「行って、エルサレムに住む者の耳に告げよ、主はこう言われる、わたしはあなたの若い時の純情、花嫁の時の愛、荒野なる、種まかぬ地でわたしに従ったことを覚えている」(エレミヤ 2:2)。

それゆえイスラエルの民がどこへ行こうが、幕屋は常にイスラエルの陣営の中央に位置し、十二部族は幕屋を中心に東西南北に陣を取りました。

ユダ部族の旗のもとにユダ・イッサカル・ゼブルン部族が東の方に、エフライム部族の旗のもとにエフライム・マナセ・ベニヤミン部族が西の方に、ルベン部族の旗のもとにルベン・シメオン・

ガド部族が南の方に、ダン部族の旗のもとに、ダン・アセル・ナフタリ部族が秩序正しく陣を取りました。

イスラエルの民と幕屋の間にはレビ部族が寝泊まりし、東の方はモーセ、アロン、アロンの子たちが、西の方にはゲルション(レビの第一子孫)子たちが、南の方にはコハテ(レビの第二の子孫)の子たちが、北の方にはメラリの子たちが着いて幕屋と、そのすべての器具と付属品を運搬し、管理しながら幕屋に仕えました。(民数記 2 章参照)

勝利にあずかる者

主なる神が雲の柱と火の柱をもって先立って行かれると、レビ人たちは幕屋をたたみ、また陣を敷くときも彼らが幕屋を組み立てました。荒野における 40 年という長い旅程において、イスラエルはどこへ行っても主なる神が定められた秩序に従って陣を配置しました。神は、荒野の期間を新婚の時のように思われ、新婚の時に新郎が新婦を心から愛するように、主は今も変わることなく、情熱をもってこの地の聖徒たちを愛されています。神の愛は尽きることなく、真実かつ完全です。この世では辛くて苦しい人生を生きているとしても、あの天国、私たちの聖なる都に入る前の新婚旅行のように思う喜びがありますように皆様に祝福いたします。

伝染病や災難、戦争、飢饉、自然災害、反逆、腐敗、混沌、恐怖だけが、今の私たちの人生を覆っているようですが、実は私たちは神様と新婚旅行を楽しむ気持ちで生きているのです。主は十字架で死と黄泉(よみ)を打ち負かされました。私たちも主とともに、その勝利にあずかる者、勝利する者となりました。私たちは主の受難にも、主の勝利の喜びにもあずかる者なのです。

主なるイエス様、主の御名によって切に祈ります

雲の柱と火の柱がとどまるところを中心にイスラエル民が陣を敷いたように、私の人生と家庭、教会のすべての聖徒たちの人生が、神の御言葉と聖霊の導きに従って整頓され、秩序正しく生きて行くようにしてください。

主のために、私の心の中心に主がお泊りになる家を建てたいと切に願います。主が私の内に深く座してくださり、永遠に離れないでください。主と共に食事をしながら生きながらえる人生になりますように。

神様のおられる幕屋が東の方に向いているように、私の知識と思考、心と感情、意志と力が、生きておられる主イエス・キリストに向くように導いてください。

私個人の問題、家族の問題、時代の暗闇、過去の傷、トラウマ、惨状、悔しさ、混沌、現在の状況に埋没している私ではなくて、雲の柱と火の柱をもって導かれる主に視線を置き、信仰によって打ち勝つ私たちになりますように。

神の御眼、御心、御名のある聖殿で、主の御顔を求め祈る聖徒たちの祈りを聞いてくださり、天において私たちの罪を赦し、この地を癒してください。

幕屋に使う材料を喜んで捧げたイスラエルの民の敬虔な思いを、私たちにも注いでください。主が再び来られる日まで、絶えず礼拝し、主の福音のために献身する私たちにならしめてください。

ベザレルとアホリアブ、そして奉仕する人たちが、主から知恵を得て幕屋を完成したように、この地に神の人を立ててくださり、彼らをすべての領域に遣わし、神の御住いを建てるようにしてください。この民族が主なる神だけを愛し仕える、神の特別な宝物、祭司の国、聖なる国民となりますように。主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。†

※ 特集 | 復活の主を受け入れよう

キム・ソンロ 教師／春川ハンマウム教会



復活がなければ、 キリスト教は存在しない



「人はなぜ変わらないのか？」——この悩みに対する回答を得る過程が、私の牧会の30年（1980年8月20日教会開拓）であった、と言っても過言ではありません。私は、ただ教会に誠実に出席し奉仕するだけではなく、初代教会の聖徒たちのように福音を伝え教会を建て上げるイエス・キリストの弟子を再生産したかったのです。

そこで、私の牧会のどこに問題があるのかと悩みながら、2000年前の初代教会に戻り、使徒行伝を何度も何度も読み返しました。しかし何度読んでも、初代教会の聖徒が変わった理由は非常に簡単で明確でした。彼らが「復活された主に会い、聖霊に満たされたこと」以外には何もなかったのです。

福音の核心、復活

こうして悩んでいるうちに、私の牧会における最も衝撃的なこ

とが分かりました。それは、私たちの信仰が使徒行伝を飛び越してしまっ、パウロ書簡に行ってしまったということでした。使徒行伝を飛び越したということを別言すれば、教会に通っていてもイエス様が主人ではなくて、依然として自分が主人だったということです。

使徒行伝の初代教会のような生命力ある教会に回復したいと願うならば、私たちは使徒行伝に戻らなければなりません。「初代教会を築き上げた原型の福音」とは何でしょうか？ 使徒行伝における福音の核心は、生きておられるイエス・キリスト、すなわち『イエス・キリストの復活』でした。

第一に、復活は歴史的事実であり、すべての人が信じる確かな証拠です（詩篇 17:30～31）。キリスト教の出発は教理的悟りではなく、「復活」という歴史的な出来事です。復活を歴史的事実として確認することは、信仰生活を始めるにあって、非常に重要なことです。初代教会の聖徒の信仰は、深遠な悟りではなくて、『事実』から出発しました。四福音書の著者が是非記録したかったことの一つは、十字架に架って死なれたイエス様がよみがえられたこと、彼らが復活の主に会ったという「事実」だったのです。（ルカ 24:36～48、ヨハネ 20:30～31 参照）

キリスト教は検証可能な信仰の根拠を持っています。キリスト教の信仰の対象であるイエス・キリストは、漠然たる存在ではなく、人類の歴史の中に実存しており、その歴史の中で実際に成された御業を通して、その方がどなたであるかを明確に知り、信じられるように確実な証拠、「復活のしるし」を示してくださったのです。歴史に対する評価は異なり得ます。しかし、起こった事実 (fact) は変えられないため、歴史的事実（証拠）に依拠して

イエス・キリストを信じることは、自身の思考や感情、時代的狀況に流されない堅い信仰の基礎を持つことになるのです。

残念なことに、現代神学の動向はますますイエス・キリストの復活の歴史性を否認する方向に流れています。復活の歴史性を主張する人たちは、かえって「非知性的」という批判を甘受しなければならないのです。さらに復活が実際に歴史の中で起こったか否かが重要なのではなく、それが今日私たちにもたらす「意味」が重要なだけだと主張しています。

しかし、「歴史性を失った」意味とは、結局「無意味」なことになります。イエス・キリストの生涯、特に、復活の意味が私たちに事実となり強い衝撃となる理由は、人間の理性によっては決して理解し難い復活が、実際に歴史の中で起こったからです。つまり、イエス・キリストの肉体の復活が實在のゆえに、その意味もすべてが實在となりえます。神が生きておられることが實在であり、聖書の御言葉も實在なのです。そして、私たちの罪のために死なれよみがえられたイエス・キリストが、今も私たちと共におられることは事実なのです。イエス・キリストの復活は歴史的事実です。したがって、神の存在と聖書が『絶対真理』となります。この単純明快な事実が、人生を変えるのです。

第二に、復活は、イエス様が神の御子であるという事実の決定的な証拠です。2000 年前、ゴルゴダの丘で 3 人が十字架に架かって亡くなりました。果たしてこの 3 人の中で誰が神の御子だったのでしょうか。そして 3 年間つき従った弟子たちにも裏切られたイエスを、私たちがいかに神の御子だと告白することができるのでしょうか。またイザヤ書 9 章 6 節には、全能なる神がひとりのみどり子としてお生まれになるという預言がありますが、果たし

て青年イエスが預言どおりに来られた神の御子であると、いかに信じることができるのでしょうか。

それは、主イエスが行われた奇跡や御言葉、善い品性のゆえではなく、ただイエス様が聖書に預言されたとおりに、十字架で死なれ『復活』されたからです。(I コリント 15:3 ~ 4)

このように復活するキリストに対する旧約の預言を完璧に成就することによって、歴史の中に実在したイエス様が神の御子であるということが確証されたのです。

これがすなわち、この世で起こった最も衝撃的な出来事なのです。主イエスの弟子トマス、イエス様を迫害したパウロ、そしてイエス様の兄弟ヤコブ、彼らがイエス様に従った理由は、復活によってイエス様が神の御子であると確認することができたからです。復活は、イエス様が私たちの主人 (Lord) であり、私たちの神であるという事実を確証するものです。

悔い改め、初代教会の出発

第三に、イエス・キリストにあって、十字架と復活は決して分離できない「一つ」です。福音は十字架と復活です。私たちが福音を述べる時、復活は十字架の死を前提としたもので、十字架は復活を前提としたものなのです。イエス・キリストは、十字架において自身の血をもって「一度に」永遠の生贄をささげることによって、すべての人の罪を担われました。「十字架」のない救いは存在しません。同時に、神は、イエス・キリストが十字架で自身の血をもってささげられた永遠の生贄をお受けになられたことを、『復活』によって全世界に宣言し、私たちを義とされたのです。(ローマ 4:25)

このように十字架と復活はどちらもなくてはならない福音の核心となる出来事であり、コインの両面のように、決して切り離

すことのできないものです (I コリント 15:3 ~ 4)。一つを否定したり、この一つだけを主張したりする半分だけの福音は、決して福音ではありません。十字架と復活を分離するのは悪魔が最も喜ばれることなのです。

キリスト論的観点からの復活と、救済論的観点からの十字架は、現代教会が切に望む初代教会を再現するにあたっては、絶対的に重要性を持ちます。初代教会の使徒たちは、イエス様はどなたなのか、つまりキリスト論的観点から『復活』を宣言したのでした。

復活によってイエス様がどなたなのかが明らかになりました。イエス・キリストの死は単なる一人の人間の死などではなくて、御子なる神が人として来臨し人類の罪を赦された、神の驚くべき贖いの出来事だったのです。復活によって十字架の真の意味が明らかにされました。この時、聖霊は、初代教会を誕生させる強力な悔い改めの御業をなされました。『悔い改め』が初代教会の出発となりました。(使徒 2:36 ~ 38)

第四に、復活の主と共に歩みましょう。私たちは、「イエス様の死と復活を信じます、イエス様が私の主人となられたことを信じます」と告白します。しかし、この信仰が真であると、いかに知ることができのでしょうか。

使徒パウロはコリント人への第二の手紙 13 章 5 節において、「あなたがたは、はたして信仰があるかどうか、自分を反省し、自分を吟味するがよい。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちにおられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見捨てられる」と述べました。

真の信仰とは、今イエス様が自分の内に宿っておられることを信じられるかで知ることができます。もし口では十字架を信じ、

復活を信じ、イエス様を主と信じると言っても、『今』イエス・キリストが私の内に宿っておられることを信じられないのならば、実はイエス様を信じているとは言えません。イエス様に対する信仰と自分への「受け入れ」は実は同一のことなので、真の信仰は「受け入れ」、すなわちイエス・キリストが私の内に宿っておられると信じることによって確証されるのです。

イエス・キリストを『主』と信じる者の人生は変化し続けます。その理由は、宗教改革者たちの叫びである『コラムデオ』、つまり「神の臨在」が内に実在するからです。イエス・キリストの復活が事実であるように、神が私の内に宿っておられることも事実です。神が私と共にいてくださるという信仰は、私たちを聖い生き方へと導いてくださいます。

イエス・キリストを『主』として信じる者は、王の王なるイエス・キリストが私の内に宿っておられることを信じる者であり、神の御前に生きていと信じる者です。世を愛することは、神の御前で姦淫することであり（ヤコブ 4:4）、キリスト者は何をするにも、言葉も仕事も、すべてにおいて主イエスの御名によってしなければなりません。（コロサイ 3:7）

私たちの人生におけるすべてのことは「神の臨在」の中で行われています。偽善に走らず、隠れて罪を犯すことができません。イエス・キリストの贖いの御業により、私たちの内に宿っておられる三位一体の神は、世の終りまで、永遠に私たちと共にいてくださいます（マタイ 28:18～20）。この事実は、キリスト者たちが血を流してでも罪と戦う理由であり、疲れ果てた人生に活力を吹き込む原動力でもあります。この世で私たちが聞いた最も良い知らせ、喜ばしい知らせです。†

✳ 特集 | 復活の主を受け入れよう

イ・チョンシク 教師／パジュ愛の教会、ナドルソム宣教会代表



イエスの復活の意味と喜び



人間は長い歴史の流れの中、不滅に対する好奇心を持ち続けてきました。ヨブは、「人がもし死ねば、また生きるでしょうか」（ヨブ 14:14）と質問しました。しかし、このような質問がヨブだけではいでしょうか。普通の知能を持っている人ならだれでも、「死後も生があるだろうか？」と、質問を問いかけてきたことでしょう。

死後も生があることを信じない人がいるかもしれませんが、そういう人であっても、この問題を考え悩んだことはあるはずです。キリスト教の礎は復活です。心臓が生命を与える血を全身に送り込むように、復活はまさに福音の心臓として、真理の全域に生命を供給してくれます。

復活は、それを中心にキリスト教全体が回転している主軸です。復活を取り除けば、キリスト教は希望的思想、ないしはもう

一つの無益な人間哲学になってしまうでしょう。イエス・キリストは死なれて終わったのではなく、よみがえり死に打ち勝たれ、なおも「もうしばらくしたら、世はもはやわたしを見なくなるだろう。しかし、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きるので、あなたがたも生きるからである」(ヨハネ 14:19)と言われました。だからキリスト者たちは、その方を信じる者に同じ復活の希望が授けられたという事実、自身の運命と人生と希望を委ねてきました。

十字架に架かった師匠のゆえに悲嘆に暮れていた弟子たちを、初代教会の勇気ある殉教者に変化させたのは、すなわち、このような信仰でした。また、聖徒の交わりを誕生させたのも復活であったし、彼らが教会になりました。教会が成立してまもなく、彼らは牢獄につながれ、刑罰を受け、鞭打たれ、悪口を言われ、さらには殺されましたが、だれも彼らに復活の事実を否定させることはできませんでした。キリスト教信仰の礎は常に存在してきたし、また常に存在するでしょう。

なぜなら復活がなかったら、救いも、キリストの神性も、永遠の命も、そして死の重要性もすべてが無に帰するからです。

このような理由から、復活は常に攻撃を受けています。復活は救いの必須条件です。救われる人ならば、決して否認できないのです。それゆえ、使徒パウロはローマ人への手紙 10 章 9 節において「すなわち、自分の口で、イエスは主であると告白し、自分の心で、神が死人の中からイエスをよみがえらせたと信じるなら、あなたは救われる」と語ります。

イエス・キリストの復活の事実を否定する人でも、自分はキリスト者であると言うかもしれません。しかし彼らはキリスト者ではありません。キリストの復活を否定する人は、誰であってもキリスト者にはなれません。これは最低限の条件です。

マルコによる福音書 16 章 1 ～ 8 節をみると、復活したイエス様が色んな人に現われた後に昇天された内容が収録されています。主イエスの極限的状况を描写した、15 章における惨憺たる内容とは劇的な対照をなしています。よみがえりであり、命であられる主は (ヨハネ 11:25)、決して死に縛られてられないため、陰府 (よみ) の勢力を打ち破り、勝利者として復活されたのです。

もしこの復活の出来事がなかったならば、たとえイエスの生涯と死が高貴なもので傲うべきことには違いないけれども、結局、この上ない悲劇に終わってしまったことでしょう。しかしイエス様は、よみがえられました。敵のすべてのそしりやあざけりを終息させ、神の御子として認められました (ローマ 1:4)。四福音書にも一様に、イエスの復活を詳細に収録しています。大ぜいの目撃者たちを復活の証人として提示します (マタイ 28 章、ルカ 24 章、ヨハネ 20 章と 21 章)。イエスの生涯と死が歴史的事実であったように、イエスの復活もまた、歴史上の一時点から発生した、厳然たる実際の出来事でした。イエスの復活の性格と意味を見てみましょう。

イエスの復活の性格

死者がよみがえる出来事は、旧約聖書にも出てきます。エリヤはザレパテのやもめの息子をよみがえらせ (Ⅰ列王記 17:17 ～ 24)、エリシャは死んだシュネムの女性の息子を生きかえらせました (Ⅱ列王記 4:32 ～ 37)。そして主イエスも、ナインの町のやもめの息子 (ルカ 7:11 ～ 18)、会堂司ヤイロの娘 (マルコ 5:22 ～ 23、35 ～ 43; マタイ 9:18 ～ 19、23 ～ 26)、及びラザロ (ヨハネ 11:43 ～ 44) 等をよみがえらせたことがあります。

しかし、イエスの復活は、彼らのよみがえりとは次元が違います。彼らは生命がながらえただけで、依然として死と陰府 (よみ)

の支配下にある体を着ていました。反面、イエス様は永遠に死なない神の新しい生命によって復活されました。その復活の御体は、病気や老衰とは関係のない聖なる体でした（Ⅱコリント 15:42～44）。このような意味から、主イエスの復活はすなわち、『眠っている者の初穂』であると言えます。（Ⅰコリント 15:20、23）

イエスの復活の意味

イエスの復活の意味は、大きく次のように分けることができます。

1) イエスの復活は、主イエスの教えが真実であることの証拠です。

イエス様は公生涯の間、何度も死と復活について予告されました。大多数の人たちの不信や嘲りにもかかわらず、その予告はそのまま実現されました。ですから私たちは、イエスのすべての御言葉と御約束が文字どおりに実現されると、確信を持つことができます。御言葉の中には人間の合理的な考えでは納得できない内容も多いのですが、復活された主を信じる信仰にあっては、納得できない内容は一つもありません。

たとえば、イエスと神は一体であられる（ヨハネ 10:30）という御言葉や、イエスの血潮がすべての罪を清められるので、彼を信じる者には永遠の命が与えられ、彼を受け入れない者には永遠の刑罰が待っているという約束や警告（マルコ 25:46）、あるいは主が聖徒たちのために住まいを用意しに行かれ、終わりの日に再び来られるという約束（ヨハネ 14:3）も、確固不動な真実なのです。

2) イエスの復活は、主イエスの身分と御働きに対する証拠です。イエス様は復活されることにより、神の御子と認められまし

た（ローマ 1:4）。神の御子としてのイエスの神性は、公生涯時代のあらゆる超自然的権能によって立証されましたが、この復活こそ、主イエスの神性を証する最も確実なしるしなのです。さらにイエスの復活は、あなたが罪と陰府（よみ）に捕らわれた人たちを、義と生命へと導き出せる力を持っておられる方であると、はっきり証言します。

3) イエスの復活は聖徒たちの復活の予型です。

イエスの復活は、眠っている者の初穂です（Ⅰコリント 15:20）。イエス様は、聖徒たちを新たに生まれさせて朽ちず、汚れず、しぼむことのない資産を受け継がせるために復活されました（Ⅱペテロ 1:3～4）。私たちが主イエスの内にあるということは、イエスと共に死に、共に復活した新しい生命を所有したという言葉で理解できます。したがって、もしイエス様が復活されなかったならば、私たちの信仰も偽りのものであり、私たちは依然として罪と陰府（よみ）の中にとどまっていたことでしょう。

4) イエスの復活は、聖徒の現在の人生における活力の素です。

私たちがキリストと共に死に、また共に復活したという信仰は、罪から抜け出し、私たちの体を義の武器として神に献げるようにします（ローマ 6:13）。不義が蔓延し、敬虔に生きる者が迫害される不条理な現実と直面し、聖徒たちも世的な方法に依存して罪惡の勢力に妥協し易くなります。しかし、私たちの人生は、現在に局限されるものではありません。栄光に輝く復活の希望が待っていると確信を持っている者は、このすべての一時的な脅威と誘惑をうまく乗り切ることができるのです。実際に、初代教会の基礎を固めつつあったイエスの弟子たちも、主が逮捕されると、恐怖に怯えて身を隠してしまいましたが、復活されたイエスを直接目撃

した後、あらゆる迫害を受け殉教されながらも、イエス・キリストの証人として使命を遂行しました（I コリント 15:30）。イエスの復活こそ、当時の弟子たちが宣べ伝えたメッセージの核心であったのです。（ルカ 24:46～47、使徒 2:32、使徒 3:15、使徒 5:32）

今日、私たちは無感動時代に生きており、表面的な理解だけに傾注する極端な利己主義時代に生きています。それゆえ、主の度にイエスの復活に関するメッセージに接する聖徒たちさえも、頭でイエスの復活を認識するだけで、その感激やそれによる信仰的決断に至るまでは及ばないことが多々あります。

しかし、主を慕い求める熱い想いがなければ、主の大いなる御恵みを体験することはできません。挫折と恐怖に包まれ隠居していた弟子たちは、初めてイエス様と会ったガリラヤで、復活された主に再び会い新たな出発をします。彼らがもともと持っていた熱い情熱と献身は、復活された主に会うことにより、新たに回復し昇華されたのです。

特に私たちは、イエス様が依然としてペテロを一番弟子とし、彼に三度にわたり、「あなたはわたしを愛しているか」と同じ質問を投げかけられた後、結論として「わたしの羊を飼いなさい」と、ハッキリと頼まれるの見ることができます（ヨハネ 21:15～18）。神の主権的な御旨に従って、彼は偉大な福音のための働き人として成長しました。

そして信仰にあって、弟子たちはこのような事柄の確実な保証を確信しつつ、主の御命令を守っていきました。彼らは復活の大いなる喜びに満たされており、そのように昇天された主が同じ有様で、突然再び現われる日を指より数えて待ち望んでいました。私たちも主イエスの復活に根拠し、信仰にあって持続的な復活の喜びと希望をもって、精一杯に生きていきましょう。ハレルヤ！マラナ・タ、主イエスよ、来てください。†



ルカによる福音書 13 章 4 節に、罪に対する審判について非常に重要なイエス様の御言葉が出てきます。「また、シロアムの塔が倒れたためにおし殺されたあの十八人は、エルサレムの他の全住民以上に罪の負債があったと思うか。」この御言葉は死と審判をただ機械的に直結させることを、主が咎められたものです。この御言葉は、伝染病で死んでいく理由が、彼らだけの罪に対する神の審判だと決めつけてはいけなと、主は言われたのでした。

今回の新型コロナウイルスは、中国の武漢という都市から 2019 年に始まり、2020 年 3 月 10 日には中国だけで 8 万人以上を感染された感染力の強いウイルスです。コロナというラテン語の名前が付いたのは、その病菌の形が日食のときに起こる光冠のようだとして、コロナウイルスと呼ばれています。

武漢市は、人口 1108 万人を超える中国で七番目に大きい都市です。中国中部では最も人口が多く、自動車メーカーの工場があ

ります。1911年清国を滅ぼし、中華民国を誕生させた辛亥革命が起こった場所。自動車産業の中心地のゆえに、別名「中国のシカゴ」とも呼ばれています。韓国人は約700人余りが住んでおり、大学生は5百人もいます。韓国との貿易量は3兆3000億ドル規模であり、韓国自動車工場もこの武漢にあります。650社の自動車関連企業が存在しています。今回私たちに恐怖をもたらしたコロナウイルスは、1988年に細胞の遺伝子を発見した研究者ハー・ゴビンド・コラナ (Har Gobind Khorana, 1922～2011) によって発見周知されたウイルスです。ですからコロナウイルスに対する研究は、まだ近年に開始されたものであるといえます。

それでは、新型コロナウイルスはどのような病気でしょうか？簡単に言えば、季節性インフルエンザのように、毎年流行する可能性を持つ伝染病です。このウイルスは、初めにコウモリからきたもので、人との接触によって伝染されたと見なされています。武漢市の海産物や家畜市場で働いているか、その周辺環境の人たちに初めに感染し、北京や深圳にまで広がるようになったと知られていますが、新型コロナウイルスの起源については今も様々な意見が取りざたされています。

この感染症の症状は、一般の風邪、肺炎と似ているいるため、武漢肺炎とも呼ばれます。患者自身はもちろんのこと、医療関係者がこのウイルス感染を治癒することができないだけでなく、呼吸困難がくれば人工呼吸器を付けなければならず、いまだに治療薬もありません。しかし、新型コロナウイルスは、以前のサーズ (Sars) やマーズ (Mers) に比べ、より感染力が強く、動物も人も感染すると言われています。

新型コロナウイルスは簡単にいえば、呼吸器疾患をもたらすウイルスです。一般的には死亡率は5%といわれています。ほとんど



は咳（せき）やくしゃみを通して感染しますが、最近の現象をみれば、空気で伝染することもあります。

神に立ち帰ろう

この伝染病に対して、私たちクリスチャンはあまり恐れすぎてもいけません、だからといって軽々しくみてもいけません。注意が必要です。感染が早く、中国や韓国、日本、イタリア、イラン等で感染者数が急増しているため、全世界は恐怖心からこれらの国の入国制限をしています、これによる大きな被害が懸念されます。特に、韓国は中国にあまりにも低姿勢な態度を取っているので、憂慮と不満の声も多くあります。

それでは、この病はなぜ武漢で発症したのでしょうか？それは、武漢の中国人が多種多様な動物を食用としているにもかかわらず、衛生施設が全く整っておらず、動物を飼育する環境も劣悪で湿気も多いことから、伝染病を誘発させる環境が揃っているからです。

ここで筆者は、このような伝染病が拡散するようになった根本的問題を聖書的に考察してみようと思います。重要なことは、こ

の伝染病は偶然に生じたものではなくて、生じる必然的な原因があるという点です。つまり、聖書的に考えれば、恐ろしい疫病・伝染病は偶然に起こるのではなく、神の審判の意味を持つという点を留意しなければならないということです。

ある牧会者は、コロナウイルスは神から送られた「死の天使」だとまで言っています。歴史を顧みれば、全世界に伝染病が広がり多くの命を失った時代が、人類の罪とは無関係でないことがわかります。しかしだからといって、今度の新型コロナウイルスを中国に対する神の審判として結論づけることが正しいとは考えません。他の国でコロナウイルスによって亡くなる人たちも含めて感染者が皆、神の審判だとはいえないからです。

ルカによる福音書 13 章 4 節に、罪に対する審判について、非常に大事な主イエスの御言葉が出てきます。

「また、シロアムの塔が倒れたためにおし殺されたあの十八人は、エルサレムの他の全住民以上に罪の負債があったと思うか。」

この御言葉は、死と審判をただ機械的に直結させることを、主は叱責されたのです。伝染病で死んでいく理由が、彼らだけの罪に対する神の審判とみなしてはいけないことを、主は言われたのでした。

人間は自然を守らず、目に見えない小さな欲望のために、自然を毀損（きそん）しています。それは様々な罪による結果であるということが出来ます。聖書の中には、不従順な者に対する審判の手段として、神が疾病を用いておられることが多く見られます。その中で、重要な箇所を見てみたいと思います。不思議なことに、新約聖書よりも旧約聖書に多くの記録があります。

まず、アモス 4 章 10 節にこのように記されています。『わた

しはエジプトにしたようにあなたがたのうちに疫病を送り、つるぎをもってあなたがたの若者を殺し、あなたがたの馬を奪い去り、あなたがたの宿営の臭気を上らせて、あなたがたの鼻をつかせた。それでも、あなたがたはわたしに帰らなかった』と主は言われる。」この箇所は、神が伝染病を審判の道具として用いられることを明確にしています。その目的は主なる神に立ち帰らせようとしている点です。

次は、サムエル記下 24 章 15 節である。「そこで主は朝から定めの時まで疫病をイスラエルに下された。ダンからベエルシバまでに民の死んだ者は七万人あった。」この箇所は、ダビデが高ぶり人口調査を行なったことを神が咎められたことから始まりした。もちろん、聖書には神が何回か人口調査を指示されたことがあります。しかし、ダビデはそのとき、自分が業績を誇示しようとして実施した人口調査のゆえに、神が激怒された審判だったのです。神はダビデに 7 年間の飢饉を起こさせようか、三カ月間敵の前に逃げるようにしようか、それとも、三日間伝染病を送ろうかと示し、彼に選ぶようにされました。ダビデは主が直接審判なさることを願い求め、その結果、イスラエルの全域で伝染病により 7 万人の人々が死なれたとの出来事が記録されています。

互いに顧み、命を伝えよう

次は、ユダのヨシャパテ王がアラムとの戦争があった時、会衆の前に立って祈った内容の一部です。歴代誌下 20 章 9 節で、ヨシャパテ王はこのように叫びました。「つるぎ、審判、疫病、飢饉などの災がわれわれに臨む時、われわれはこの宮の前に立って、あなたの前におり、その悩みの中であなたに呼びわります。

すると、あなたは聞いて助けられます。あなたの名はこの宮にあるからです」と。この御言葉から、私たちは神が災難、戦争、戒め、伝染病、飢饉等を手段として用いられることを見るができます。

それゆえ、ヨシャパテはこのように祈りました。「われわれの神よ、あなたは彼らをさばかれないのですか。われわれはこのように攻めて来る大軍に当る力がなく、またいかにすべきかを知りません。ただ、あなたを仰ぎ望むのみです」（歴代誌下 20:12）。その結果を聖書はこのように記録しています。「彼らが歌をうたい、さんびし始めた時、主は伏兵を設け、かのユダに攻めてきたアンモン、モアブ、セイル山の人々に向かわせられたので、彼らは打ち敗られた」（歴代誌下 20:22）と。

詩篇 91 篇 3 節には、伝染病に対して「主はあなたをかりゅうどのわなと、恐ろしい疫病から助け出されるからである。」と記述しています。実際、神の摂理はあまりにも奥深いゆえ、疾病を通して祝福をくださる場合もありますし、時には審判の道具として用いる場合もあります。また、人間に悟りを与えるために疾病を用いたりもなされます。

ですから、私たちは全世界に広がっている新型コロナウイルスを思うとき、政府が強調する多くの衛生的方法手段を取り全国的に協力し合うべきであるが、同時に、聖徒たちは神に祈りつつ、私たちが今まで犯した罪はなにかを探り、悔い改めの機会にするのが正しい道であると信じます。

今回の疾病の蔓延の中で、「これがすべて私たちの罪であり、私の罪のためです」と悔い改めの祈りをする姿勢こそが、主に喜ばれることです。私たちが信じる神は全世界を統べ治められる全能なる神のゆえに、国家や社会に問題が起きた場合には、我々聖

徒の正しい姿勢を求め祈ることです。特に、この世の指導者層にいる人たちは、私たちが自然を毀損し破壊した代価として、多くの罪のない人々が死んでいくことを、悔い改め祈らなければなりません。

したがって筆者は、新型コロナウイルスはお金に目が眩み、自然を傷つけ、非衛生的生活をし続け、常に不平不満を口にして厚かましく生きているすべての人たちに、悟りを与えるための警告であるとみなします。

今回は特別に、大邱（テグ）で異端とされている新天地から多くの人がコロナウイルスに感染されました。自分たちは神が特別に守ってくださるから病菌ウイルスは入ってこない、という信仰的傲慢から始まったのです。

コロナウイルスにおいて最も気を付けるべきことは、他の人との接触を避けることです。人々が集まる職場、学校、保育所、幼稚園、教会のような公的な施設で、各自が気を付けなければ今度のウイルス感染を防ぐことはできません。残念なことは、マスクをはじめ、各種生活必需品の買いだめが盛んに起こっていることです。互いに分け合い協力しなければならないときに、この機会をお金を稼ぐきっかけにすると是非常に残念なことです。

最後に、このことを通して私たちが神の国の法則と御心を悟ることができればと思います。自分のことだけを考えることから抜け出し、主が与えてくださった周囲の人々に、深い関心を持つきっかけになればと考えます。特に、国と隣人のために切に祈る私たちになればと思います。皆が絶望と死を語るとき、信徒である私たちは神の希望と永遠の生命を伝えるべき者なのですから。†

あなたの初めは小さくあってもあなたの終りは非常に大きくなるであろう（ヨブ記 8:7）



あなたをプラスの人生へと導く

しなんげ

5

2020

純福音東京教会 文書宣教会

〒160-0021 東京都新宿区歌舞伎町2-2-19 Tel.03-3232-0067 Fax.03-3232-0729 www.fgtc.jp

Full Gospel Tokyo Church